

フランス語における総称的用法の 不定名詞句 UN N について*

長 沼 圭 一

1. はじめに

フランス語においては、総称文の主語として現れる名詞句は、それが可算名詞である場合、次のように3つの形が観察される。

- (1) a. Les chats aiment la musique religieuse.
- b. Le chat aime la musique religieuse.
- c. Un chat aime la musique religieuse. (KLEIBER, 2001, p. 67)

すなわち、les N, le N, un N という3つの形が総称文において用いられうるのである¹⁾。しかしながら、言うまでもなく、これら3つの文は全く同じことを表しているわけではなく、とりわけ un N については、le N, les N に比べ、総称文で使用することができるためには多くの制約が存在する。果たして、総称文に現れる un N がどのような性質のものであるのか、以下で考察を試みる。

2. 先行研究

ここでは総称の un N を扱った代表的な先行研究について、年代を追って見ていくことにする。

2.1. 古川 (1978)

古川 (1978) は総称名詞句全体を対象としているが、まず「総称用法に固有の冠詞は存在しない」ということを指摘し、したがって、un N は、(2) のように総称的価値を担うこともあれば、(3) のように個別的解釈を担うこともあると述べている。

(2) Un homme est un homme. (p. 32)

(3) Un homme entra. (*ibid.*)

また、古川は、総称不定名詞句 un N のいくつかの特徴について指摘している。総称不定名詞句 un N は、「サンプル抽出になるのであって、話者は、しばしば、個別的な特定の構成要素を念頭にもっていると考えられ」(p. 45)、したがって、「多くの場合、discours における特定の situation に結びついて」(*ibid.*)おり、以下の例のように、「情緒的要素を含まない客観的事実を記述する文は、discours における特定の situation に結びつきにくいので、不定冠詞の使用は難しい」(*ibid.*)とのことである。

(4) a. Le chien est un mammifère.

b. *Un chien est un mammifère. (*ibid.*)

(5) a. Le porc est un animal omnivore.

b. *Un porc est un animal omnivore. (*ibid.*)

古川は、「定冠詞の機能は全体的同定 (identification totale)、不定冠詞および部分冠詞の機能は部分的同定 (identification partielle) と呼ぶる操作を行なう」(p. 34) ことであり、「総称定名詞句と総称不定名詞句のそれぞれの総称性の相違は、前者は絶対的総称 (générique absolu) 後者は相対的総称 (générique relatif) と呼ぶべきものである」(p. 43) と指摘し、「総称不定名詞句では、部分的同定が行われているため、部分的な構成要素とクラス全体とを結びつけるものがなくてはならない」(p. 45) ので、「総称不定名詞句の成立には、しばしば、動詞の法性 (modalité)、アスペクトなどの条件が必要である」(*ibid.*)としている。

(6) a. *Un bouquet fait plaisir.

b. Un bouquet fait toujours plaisir.

c. Un bouquet, ça fait toujours plaisir.

d. Certes, un bouquet fait plaisir.

e. Un bouquet ferait plaisir. (CULIOLI, 1976, cité dans 古川, 1978, p. 46)

(7) Une jeune fille doit être modeste. (KLEIBER, 1977, p. 5, cité dans 古川, 1978, p. 46)

- (8) Un piano doit toujours être soigneusement accordé. (ROCHET, p. 298, cité dans 古川, 1978, p. 46)
- (9) Un pâté doit être glacé avant d'être servi. (ROCHET, p. 298, cité dans 古川, 1978, p. 46)
- (10) Une jeune fille peut avoir de l'audace. (古川, 1978, p. 46)

(6) から (10) の例が示すように、条件法の動詞、総称性を保証する副詞、*devoir*, *pouvoir* などの法助動詞の存在により、容認可能となることが観察される。

2.2. 林 (1984)

林 (1984) は、*un N* を主語に持つ総称文には 2 つのタイプがあることを指摘している。すなわち、次の (11) のように *un N* の指示が *transitoire* なタイプと、(12) のようにそうでないタイプである。

- (11) Un chien ne vole pas. (p. 263)
- (12) Un chien est un carnivore. (*ibid.*)

林によれば、(11) には、「それが犬であるなら飛ぶことはあるまい」といった内容が対応しており、この場合、「ある状況に見出される個別例があって、それについて起こりうることを判断したことに対応しているわけである。ただしその例が観念的な個として扱われることが一般化の条件であることは言うまでもない」(p. 265) とのことである。一方、(12) については、同じ類の任意の個に生じうることといったものではなく、「したがって、*si c'était un chien, ce serait un carnivore* のように解釈しようとしても無意味である」(*ibid.*) と説明している。(12) においては、属詞名詞が主語名詞を概念的に包摂しており、*être un N₁* に *être un N₂* を結び付けた形であるとのことである。以上の林の考察を踏まえて (11) と (12) をパラフレーズすると以下ようになるであろう。

- (11') Si c'est un chien, alors ça ne vole pas.
- (12') Être un chien, c'est être un carnivore.

林は、(11)と(12)のような2つのタイプを区別する要因として、主語・述語間の概念上の関係を挙げている。すなわち、(11)においては、述語が主語に対して外付の関係にあるのに対し、(12)においては、述語が主語に対して内属の関係にあるということである。

2.3. 藤田 (1985)

藤田 (1985) は、まず不定冠詞 *un* の基本操作を次のように設定している。

「*un N* : 1) 名詞概念 *N* を非連続的に把握することによって、複数のメンバーを含む集合を設定する。2) *un N* は 1) で構築された集合から任意の一メンバーを抽出する。つまり *un N* 文の言表内容はその集合から抽出された任意の一メンバーについて真となる。」 (p. 2)

この操作により、不定冠詞 *un* には、「*générique*», 「*spécifique*», 「*non-spécifique*」などの *effet de sens* が生まれるという。

さらに、*un N* の総称的用法については、藤田は以下のように述べている。

「*un N* においては、名詞概念は非連続的な把握を受けるが、*N* の外延をメンバーとして集合が構築され、さらに文内容がそのなかの任意の一メンバーについて真となるとき、「総称的」な *effet de sens* が生まれる。集合からどのメンバーを抽出しても文内容がその一つ一つについて真となるからである。

こうしたタイプの述語付与、すなわち、KLEIBER & MARTIN の言う「*prédication distributive*」が成立するためには、抽出される一メンバーが他のメンバーといわば最大限の互換性を保っていることが前提条件となる。つまり抽出されるメンバーは、自らを他のメンバーから切り離して区別してしまわないような特性を与えられていなければならない。ところで抽出した一メンバーにそうした特性を付与するのは *un N* 文の述部 (*prédictat*) である。したがって *un N* の「総称的」用法が成立するためには、*un N* 文が KLEIBER (1981a) の言う非特定化述語 (*prédictat non spécifiant*) を含んでいなければならない。」 (pp. 2-3)

また、藤田は、制約の厳しい un N 総称文の容認度の改善について、多方面から考察を行っており、以下のような例を示している。

1) 主題化

- (13) a. ?Un verre est cassable.
b. Un verre, c'est cassable. (p. 10)

2) 対照

- (14) a. ?Un chien est carnivore.
b. Un chien est carnivore, mais un poulet ne l'est pas. (p. 11)

3) 属詞形容詞の名詞化

- (15) a. ?Un frigidaire est indispensable.
b. Un frigidaire est un appareil indispensable. (*ibid.*)

4) prédication の枠組限定

- (16) a. ?Un vélo est utile.
b. Un vélo est utile pour les petites distances. (p. 12)

5) 主語名詞への修飾要素の付加

- (17) a. ?Une conférence est ennuyeuse.
b. Une conférence trop longue est ennuyeuse. (p. 13)

6) 頻度を示す副詞 (句)

- (18) a. ?Un Alsacien est travailleur et obstiné.
b. Un Alsacien est souvent travailleur et obstiné. (*ibid.*)

7) 度合・程度の副詞

- (19) a. ?Un Français est chauvin.
b. Un Français est plus ou moins chauvin. (p. 14)

8) モダリティ操作

8a) 法助動詞、条件法

- (20) a. ?Un politicien est honnête.
b. Un politicien devrait être honnête. (*ibid.*)

8b) 補文化

- (21) a. ?Un homme est mortel.
b. Il est certain qu'un homme est mortel. (p. 15)

8c) 判断の副詞 (句)

- (22) a. ?Une moto est utile.

b. Une moto est utile, évidemment. (*ibid.*)

8d) 否定疑問文

(23) a. ?Un soldat est brave.

b. Un soldat n'est-il pas brave ? (*ibid.*)

9) 外在的意味をもつ名詞

(24) a. ?Un chien est vivipare.

b. Un mammifère est vivipare. (p. 16)

2.4. CORBLIN (1987)

CORBLIN (1987) は、総称的解釈の un N について 2 つのタイプに分類している。1 つは他の数との対立のあるタイプと数の対立が中和されたタイプである。

(25) a. Un professeur peut encadrer quinze élèves.

b. Deux professeurs peuvent encadrer quinze élèves. (p. 62)

(25a) においては、un は「1」という特定の数を表しており、これを (25b) のように他の数に置き換えた場合には、明らかに異なる真理値をとることである。一方、次のような対にはこのような数の対立は見られないという。

(26) a. Un homme ne pleure pas en public.

b. Deux hommes ne pleurent pas en public. (p. 63)

CORBLIN によれば、(26) のような例により、不定冠詞 un がいわば「退化した数 (nombre affaibli)」と見なされることが説明されるとのことである。

2.5. 福島 (1991)

福島 (1991) は、藤田 (1985) を敷衍する形で総称の un N についての議論を展開させている。藤田は、総称文を (27) のような「非評価型総称文」と (28) のような「評価型総称文」に分類している。

- (27) a. L'homme est mortel.
b. Le chien est carnivore. (藤田, 1985, p. 8)
- (28) a. Les singes sont amusants.
b. Les Français sont chauvins. (*ibid.*)

(27), (28) では、les N あるいは le N が主語となっているが、これらを un N に換えると容認度は下がる。

- (27') a. ?Un homme est mortel.
b. ?Un chien est carnivore. (*ibid.*, p. 9)
- (28') a. ?Un singe est amusant. (*ibid.*)
b. ?Un Français est chauvin. (*ibid.*, p. 10)

これらの un N 総称文は、藤田が挙げている前述の操作によって容認度が上がるが、福島は、これらの操作について、「たといそれが「客観・非評価」的な「科学的真理」を表すものであれ、より「主観的・評価的」なものに近付ける役割を果たすものと一括し得る」(p. 95) と述べている。福島によれば、総称の un N は本質的に「言表の側に近い、即ち《主観的・評価的》なもの」であり、「容認度改善手段」は、つまるところ、「下位範疇の設定」、「プロトタイプ化」、「概念化」の操作であって、それによって「範疇的に言表内容が真実と成る」ようなコンテキストが作られている、とのことである。

2.6. 東郷 (2002)

東郷 (2002) は、un N 総称文として容認度が高いのは以下のような述語であると指摘している。

- (29) Un madrigal est polyphonique. (LAWLER, 1977, p. 116, cité dans VOGELEER & TASMOWSKI, 2005, p. 65)²⁾
- (30) Un carré a quatre côtés. (CORBLIN, 1987, p. 49)
- (31) Un mouton a quatre pattes. (GALMICHE, 1983, cité dans 東郷, 2002, p. 10)
- (32) Un enfant se tait à table. (KLEIBER, 1989, cité dans 東郷, 2002, p. 10)

すなわち、本質の特徴を表す述語 (29)、定義を表す述語 (30)、必要条件を表す述語 (31)、規範的意味の述語 (32) である。この基準に合わない述語では一般に容認度が低いという。

(33) ?Un vélo est utile. [= (16a)]

(34) ?Une conférence est ennuyeuse. [= (17a)]

(35) ?Un chat est affectueux. (MULLER, 1987, cité dans 東郷, 2002, p. 10)

(36) ?Un singe est amusant. [= (28'a)]

また、東郷は、un N が総称文以外では総称名詞句として用いることができないことを指摘している。

(37) a. Aujourd'hui, je vais vous parler d'un castor.

b. Aujourd'hui, je vais vous parler du castor.

c. Aujourd'hui, je vais vous parler des castors. (p. 14)

すなわち、「b. の le castor と、c. の les castors は総称読みができる。ところが、a. の un castor は特定読みしかできない。この事実は示唆的である。le N / les N は文の述語と関係なく総称の意味を持ちうるが、un N が総称読みできるかどうかは、文の述語に依存していることを示している。un N 自体には総称の意味はないのである」(ibid.) とのことである。

2.7. VOGLEER & TASMOWSKI (2005)

VOGLEER & TASMOWSKI (2005) は、un N を主語に持つ総称文としては、分析的な述部を持つもの (BURTON-ROBERT, 1977)、本質的または内在的特性を示しているもの (LAWLER, 1977)、前もって定められた規定に属する述部を持つもの (COHEN, 2001)、あるいは社会的な合意が対象となる述部を持つもの (CARLIER, 1998, p. 120) が存在することを指摘している。

VOGLEER & TASMOWSKI によれば、un N には *thétique* な読みと *catégorique* な読みの2つがあるという。

(38) a. Que se passe-t-il ? — Un enfant crie dans la rue.

b. Un Renard, voyant un fromage dans le bec d'un Corbeau, se mit à louer

son beau chant. (Ch. PERRAULT) (p. 60)

(38a) の *un enfant* はある出来事の中にたまたま存在している値であるのに対し、(38b) の *un Renard* は発話の前から存在している値であり、発話の主題としての機能を果たしているという点で異なっているというのである。このような2つの読みとの区別は、総称の *un N* にも見られることを VOGELEER & TASMOWSKI は指摘している。

- (39) a. *Un gentleman ouvre la porte aux dames. Il porte une cravate même quand il dort et il participe à la chasse à courre.*
b. (Tu dis que) *John est un gentleman ? Tu me fais rire ! Un gentleman ouvre la porte aux dames. Lui, il me l'a claquée au nez l'autre jour.* (p. 68)

(39a) は *gentleman* の定義を示す文であり、ここでの *un N* は *catégorique* な読みで用いられているのに対し、(39b) の総称文は *John* が *gentleman* でないことを示すための論拠として挙げられた文に過ぎず、この場合は *thématique* な読みとなるという。

また、VOGELEER & TASMOWSKI は次のような総称文について、

(40) *Un chrétien est charitable.* (p. 54, p. 65)

次のように解釈できることを示している。

- (40') a. *il est génériquement nécessaire qu'un individu x quelconque soit charitable si x est inclus dans l'espèce les chrétiens*
b. *il est génériquement nécessaire que x soit charitable pour que x soit inclus dans l'espèce les chrétiens* (p. 66)

2.8. 稲葉 (2010)

稲葉 (2010) は、総称の *un N* に関する先行研究において、一方では、

(41) a. *L'homme est mortel.* [= (27a)]

b. ?Un homme est mortel. [= (27'a)]

のような例が示すように、述語内容が一般的な定理や科学的定義を表す場合には不定名詞句 un N の総称が不適切であるという主張があるのに対し、他方では、

(42) Un carré a quatre côtés. [= (30)]

(43) Un mouton a quatre pattes. [= (31)]

(42) のように定義を表す述語や (43) のように必要条件を表す述語において総称の un N の容認度が高いという主張があることに疑問を投げかけている。稲葉は、un N 総称文を「格言的総称」と「数対比的総称 (interprétation générique à nombre contrastif)」の2つに分類し、(42)、(43) のような例は、科学的定義や一般的真理を表す総称ではなく、数対比的総称であると主張している。例えば、(42) については、次のように示すことができる。

(42') a. Un carré a quatre côtés.

b. Deux carrés ont huit côtés.

c. Trois carrés ont douze côtés. (p. 151)

すなわち、四角形の数が増えればそれに比例して角の数も増えるのであり、比例式 $y = 4x$ が成立するのである。

また、稲葉は、

(44) Un enfant se tait à table. [= (32)]

のような総称文は格言的総称であり、話し手の主観的判断を表し、例外を含みうるものであり、さらには、発話者と共発話者の間に un N に対する見解のずれが生じていることが観察されることを指摘している。

(45) Geneviève : Dans sa dernière lettre, il me disait qu'il était triste parce qu'il ne me verrait pas enceinte. Et c'est peut-être aussi bien comme ça. Je suis affreuse.

Mme Émery : *Une femme enceinte est toujours belle, ma chérie.* (『シェルブールの雨傘』, 2003, p. 70, cité dans 稲葉, 2010, pp. 145–146)

すなわち、(45)においては、Genevièveが妊娠している自分の姿を「みっともない」と判断しているのに対し、Mme Émeryが「妊婦は常に美しいものだ」という格言的総称文を発し、2人の間での見解のずれが示されているということである。

2.9. 格言的総称と数対比的総称

CORBLIN (1987) は、総称の un N には、他の数との対立のないタイプ (46) と他の数との対立のあるタイプ (47) とがあることを指摘していた。

(46) Un homme ne pleure pas en public. [= (26a)]

(47) Un professeur peut encadrer quinze élèves. [= (25a)]

この区別は、稲葉 (2010) が指摘している格言的総称 (48) と数対比的総称 (49) の区別に対応していると考えられる。

(48) Un enfant se tait à table. [= (32), (44)]

(49) Un carré a quatre côtés. [= (30), (42)]

CORBLIN (1987) が指摘しているように、数の対立が中和された un N においては、un がいわば「退化した数」と見なされうるが、他の数との対立が見られる un N においては、un はあくまでも「1」という数を示す機能を果たしている。このことから、前者が無標の「不定冠詞」であるのに対し、後者は有標の「数詞」として区別することも可能であろう。

また、次の総称文

(50) Un chien ne vole pas. [= (11)]

は、林 (1984) の説明に従えば、

(50') Si c'est un chien, alors ça ne vole pas. [= (11')]

のようにパラフレーズできると考えられるが、これは (48') のように格言的総称には有効であるが、

(48') Si c'est un enfant, alors ça se tait à table.

数対比的総称に対してはこのようなパラフレーズは適切ではなく、むしろ次のようにパラフレーズするのが適切であろう。

(49') S'il y a un carré, alors il y a quatre côtés.

3. 実例分析

ここでは、フランス語コーパス Frantext から、un N を主語に持つ総称文を収集し、考察を行う。

収集された例は18例であるが、収集した例文のほぼ全てに藤田 (1985) が指摘している、un N 総称文の容認度を改善する操作が当てはまるものが観察される。とりわけ、pouvoir, devoir などの準助動詞 (51) や条件法 (52) などのモダリティに関わる操作や主語名詞への修飾要素の付加 (53) などが多く見られた。

(51) Un coin s'imisce entre la classe que conceptualise Victor et la somme dépareillée d'ouvriers qui la composent et dont aucun, à mes yeux, ne peut avoir exactement la même sexualité, ni la même morale. Je n'aime pas que les mots trahissent les choses. Qu'ils les exaltent, oui, mais sans les dénaturer. *Un homme ne peut être coupable, ou innocent, de naissance.* Mon frère Philippe me donnerait lui-même raison, sur ce point. (ARNAUD, Claude, *Qu'as-tu fait de tes frères ?*, 2010, p. 183, *La classe incarnée*, Frantext)

(52) Monique sanglote sous un châle.

- Je n'en peux plus...

- Nous sommes pareilles, murmure Laura qui se glisse à ses côtés.

Elles se consolent, toutes les deux condamnées à vivre au pays du deuil. Ou plutôt, chacune console l'autre comme s'il s'agissait de son enfant. Elles

sont à la fois la vie et la mort. Femmes perdues. Enfants perdus. *Un homme ne comprendrait pas*. La preuve, Pierre entre dans le salon et demande :

- Qu'est-ce que vous complotez toutes les deux ?

Devant le visage des deux femmes, il se reprend vite et s'assoit auprès de Laura. (BOIS, Ariane, *Et le jour pour eux sera comme la nuit*, 2009, p. 100, Frantext)

- (53) La violence organisée des hommes se fonde toujours sur un système de justification. Chacune des assertions de l'argument semble fondée sur des faits, des valeurs éthiques. Dans un enchaînement d'apparence logique, on assimile entre elles des situations radicalement différentes. La violence du patronat vaut celle d'un pouvoir fasciste. *Un bon flic est un flic mort*. Nixon égale Hitler. La justification de la violence se sert comme d'un levier de la tension entre légalité et légitimité. (PERRUT, Dominique, *Patria o muerte*, 2009, p. 250, *Première Partie Marina Morena, 68 Carnets de Frédéric*, 1979, Frantext)

収集例18例のうち、主語の un N に修飾語句が付加されていないものが7例、修飾語句が付加されているものが11例であった。

un N に現れている名詞を観察してみると、人を表す語が16例、人以外を表す語が2例であった。人を表す語は、homme, femme のような性別を表す語 (54)、Français のような国籍を表す語 (55)、ouvrière, paysan のような職業を表す語 (56)、bourgeois のような身分を表す語 (57) のいずれかに当てはまるという特徴が見られた。

- (54) De Ryons.

Alors, je suis surtout l'ami des femmes qui ont eu un amant ; et, comme, suivant La Rochefoucauld toujours, elles ne s'en tiennent pas à cette première épreuve, un beau jour...

Madame Leverdet.

Vous êtes le second...

De Ryons.

Non, je n'ai pas de numéro, moi. *Une femme bien élevée ne passe pas d'une passion à une autre sans un intervalle de temps plus ou moins long*. Il

n'arrive jamais deux accidents de suite sur le même chemin de fer. Pendant cette embellie, la femme a besoin d'un ami ; c'est alors que j'apparais. (DUMAS FILS, Alexandre, *L'Ami des femmes*, 1869, p. 66, *Acte I Scène V*, Frantext)

- (55) Au petit jour, les isolées sont emmenées dans des autobus pour une direction inconnue. On les entend chanter Le Chant des adieux, La Marseillaise, Le Chant du départ. Ce n'est plus du chant, c'est un cri de rage. « Aux armes, citoyens... », « Tyrans, descendez au cercueil ». Parfois, c'est un sursaut d'héroïsme « La République nous appelle, sachons vaincre ou sachons mourir. *Un Français doit vivre pour elle, pour elle un Français doit mourir.* » (SIEFRIDT, Françoise, *J'ai voulu porter l'étoile jaune : journal de Françoise Siefridt, chrétienne et résistante*, 2010, p. 107, *Journal de Françoise Siefridt « Amie des juifs »*, Frantext)
- (56) Hélas ! les loisirs que le poète païen annonçait ne sont pas venus ; la passion aveugle, perverse et homicide du travail transforme la machine libératrice en instrument d'asservissement des hommes libres : sa productivité les appauvrit. *Une bonne ouvrière ne fait avec le fuseau que cinq mailles à la minute, certains métiers circulaires à tricoter en font trente mille dans le même temps.* Chaque minute à la machine équivaut donc à cent heures de travail de l'ouvrière ; ou bien chaque minute de travail de la machine délivre à l'ouvrière dix jours de repos. (LAFARGUE, Paul, *Le Droit à la paresse*, 1883, p. 60, 3. *Ce qui suit la surproduction*, Frantext)
- (57) Une fille de mineur ayant été retrouvée sans vie en avril 1972, après un viol dans un terrain vague de la cité ouvrière de Bruay-en-Artois, il veut nous convaincre, lors d'une réunion dans les sous-sols de Normale sup, que « *seul un bourgeois peut faire ça* ». (ARNAUD, Claude, *Qu'as-tu fait de tes frères ?*, 2010, p. 182, *La classe incarnée*, Frantext)

(54) から (57) の例において主語 un N に現れている名詞は、属詞位置で無冠詞で現れる名詞とほぼ一致していることに気付く。一般に、文法書においては、属詞の名詞が、職業、身分、国籍等を表す場合、無冠詞であることが指摘されている。

(58) Pierre est professeur.

(59) Paul est Français.

RIEGEL, PELLAT & RIOUL (1994) においては、次のように述べられている。

「主語または目的補語の属詞 (On l'a élu *député* — On l'a nommé *général*. — Elle a pris un *vieillard pour amant*) が職業, 社会的役割あるいは身分, 国籍を表す場合, この属性付与がクラス分け (*classement*) の操作しか行っていないければ限定詞を付けないのが慣例である [...]」³⁾

拙論 (2002) において、このような属詞位置で無冠詞で現れる職業、国籍等を表す名詞が「役割記述機能」を持っていることを指摘した。また、拙論 (2003, 2005) においては、KUPFERMAN (1991) を援用して、役割記述機能が働く条件として、社会的・文化的分類の操作が働いており、分類すべきクラスがあらかじめ設定されていることが挙げられることを指摘した。すなわち、属詞位置で無冠詞で現れる名詞は職業、身分、国籍を表すものに限られるわけではなく、上記の条件を満たすものであればよく、性別、星座、宗教などを表す名詞も属詞位置に無冠詞で現れることが可能である。

(60) Quand on est femme, on ne dit pas ces choses-là. (Diane Tell, *Si j'étais un homme*)

(61) Elle est Gémeaux.

(62) Elles sont protestantes.

さらには、次の例が示すように、列車の座席の区別や個人の嗜好を表す「○○派」というようなニュアンスの場合にも属詞位置において名詞が無冠詞で現れる⁴⁾。

(63) Ce passager est fumeur. (KUPFERMAN, 1991, p. 69)

(64) Je suis plutôt foot.

では、なぜ属詞位置に無冠詞で現れる名詞と同じタイプの名詞が、un Nを主語とする総称文の主語名詞として現れやすいのであろうか。まず、un Nを主語に持つ総称文の特徴について考えてみると、先行研究において、客観的・科学的な記述ではなく、主観的・評価的な記述であることが指摘されている。一方、属詞位置に無冠詞で現れる名詞は、社会的・文化的分類の操作が働いており、分類すべきクラスがあらかじめ設定されているものであることを拙論(2003, 2005)において指摘した。このように社会的・文化的にあらかじめ設定されているカテゴリーというのは、暗黙のうちに構築された社会的規範やステレオタイプが存在しているであろうことが容易に想像される。例えば、男というのはこうあるべきだ⁵⁾、女というのはこうあるべきだ、という規範はどの社会にも存在するであろうし、日本人はこんな風だ、フランス人はこんな風だ、という国民に関するステレオタイプもよく話題に上るものである。このように、職業、身分、国籍、性別などを表す名詞は、社会的・文化的にあらかじめ設定されているカテゴリーであるがゆえに、すでに一般に認められている何らかの評価が構築されているため、主観的・評価的内容を表す un N 総称文と相性がよいと考えられるのである。

また、不定冠詞が用いられる理由としては、記述があくまでも主観的なものであるため、普遍性を含意する定冠詞とは相いれず、記述されている発話の原因となる特定の個体が語用論的に存在していることが想定されているため、un Nの形で具現化することが自然であると推測される。

4. おわりに

本稿では、総称文の主語として現れる un N について考察を行った。これまで先行研究においては、le N を主語とする総称文が客観的・科学的な記述であるのに対し、un N を主語とする総称文は主観的・評価的な記述であり、多くの場合モダリティ操作が働いていることが指摘されてきた。

総称文の主語として現れる un N の名詞を観察してみると、大部分は、職業、身分、国籍、性別などを表す名詞であり、コピュラ文の属詞位置に無冠詞で現れる名詞と同じタイプの名詞であることが分かる。このタイプの名詞は、社会的・文化的分類の操作が働いており、分類すべきクラスがあらかじめ設定されているという特徴を持っている。このことから、この

ような名詞に対しては、すでに一般に認められている社会的規範やステレオタイプなどの評価が構築されており、それによって、主観的・評価の内容を記述する総称文に容易に用いられうると考えられる。また、un N の形で現れているのは、発話の原因となる特定の個体が語用論的に存在していることが示唆されているからであると推測される。

注

- * 本研究は JSPS 科研費 23520515 の助成を受けたものである。
- 1) これらの他に des N を主語とする総称文も存在するが、極めて稀であるためここでは言及しない。総称の des N については、古川 (1978)、森・東郷 (2004)、VOGELEER & TASMOWSKI (2005) 参照。
 - 2) 実際に東郷 (2002) が挙げているのは、LAWLER (1973) の英語の例であるが、フランス語の文で統一するため、VOGELEER & TASMOWSKI (2005) で挙げられている LAWLER (1977) のフランス語の例を示した。
 - 3) « Lorsque l'attribut (du sujet ou du complément d'objet : *On l'a élu député — On l'a nommé général.* — *Elle a pris un vieillard pour amant*) désigne une profession, un rôle ou un statut social, une nationalité, l'absence de déterminant est de règle si cette attribution n'a pour rôle que d'opérer un classement [...] » (RIEGEL, PELLAT & RIOUL, 1994, p. 165)
 - 4) このような表現について詳しくは、藤田 (2012) 参照。
 - 5) フランス語において、un homme を主語とする総称文は、(52) のように「男」を表すものばかりではなく、(51) のように「人」を表すものも見られるが、この場合も生物学的な意味でのヒトではなく、次の属詞の例と同様、「神」との対比によるカテゴリーの設定であると考えられる。
(i) *Le Pape se peut fort bien tromper. Il est homme comme les autres.* (MONTHERLANT, *Port-Royal*, p. 39, cité dans 朝倉, 2005, p. 65)

参考文献

- 朝倉季雄 (2005) : 『フランス文法集成』, 白水社。
稲葉梨恵 (2010) : 「不定名詞句 un N の総称解釈について」, 『筑波大学フランス語・フランス文学論集』, 25, 筑波大学フランス語・フランス文学研究会, pp. 139-154.
東郷雄二 (2002) : 「フランス語の不定名詞句と総称解釈」, 『京都大学総合人間学部紀要』, 9, 京都大学総合人間学部, pp. 1-18.

- 長沼圭一 (2002) : 「コンピュータ文の属詞として現れる無冠詞名詞句」, 『筑波大学フランス語・フランス文学論集』, 17, 筑波大学フランス語・フランス文学研究会, pp. 153-187.
- 長沼圭一 (2003) : 「役割記述機能を持つ無冠詞名詞句について—*quand on est femme, on ne dit pas ces choses-là*—」, 『フランス語フランス文学研究』, 83, 日本フランス語フランス文学会, pp. 90-100.
- 林迪義 (1984) : 「不定冠詞 UN の用法」, 『紀要 言語・文学編』, 17, 愛知県立大学外国語学部, pp. 259-270.
- 福島祥行 (1991) : 「UN N の総称用法」, 『フランス語フランス文学研究』, 59, 日本フランス語フランス文学会, pp. 89-101.
- 藤田知子 (1985) : 「*un N* « générique » について」, 『フランス語学研究』, 19, 日本フランス語学研究会, pp. 1-21.
- 藤田知子 (2012) : 「*Vous êtes théâtre ou cinéma ?* 構文に関する覚書」, 『神田外語大学紀要』, 24, pp. 57-76.
- 古川直世 (1978) : 「フランス語における総称名詞句の特性」, 『文藝言語研究言語編』, 3, 筑波大学文芸・言語学系, pp. 31-51.
- 森香奈絵・東郷雄二 (2004) : 「*des N* 主語を持つ総称文と状況量化」, 『フランス語学研究』, 38, 日本フランス語学会, pp. 39-45.
- CORBLIN, F. (1987) : *Indéfini, défini et démonstratif*, Librairie Droz, Genève-Paris.
- KLEIBER, G. (2001) : « Indéfinis : lecture existentielle et lecture partitive », *Typologie des groupes nominaux*, Presses Universitaires de Rennes, pp. 47-97.
- KUPFERMAN, L. (1991) : « Structure événementielle de l'alternance UN / Ø devant les noms humains attribués », *Langages*, 102, pp. 52-75.
- NAGANUMA, K. (2005) : « Les syntagmes nominaux sans déterminant en position attributive dans une phrase copulative : à propos de la fonction de description de rôle », *Studies in Foreign Language Education*, 27, Foreign Language Center, University of Tsukuba, pp. 107-116.
- RIEGL, M., J.-C. PELLAT & R. RIOUL (1994) : *Grammaire méthodique du français*, Presses Universitaires de France, Paris.
- VOGELEER, S. & L. TASMOWSKI (2005) : « *Les N, un N, et des N* en lecture générique », *Travaux de linguistique*, 50, pp. 53-78.

Le syntagme nominal UN N à emploi générique en français

Keiichi NAGANUMA

En ce qui concerne les phrases génériques en français, le sujet peut se réaliser, lorsqu'il s'agit d'un nom comptable, en trois formes : *les N*, *le N* et *un N*. Comme le signalent de nombreux auteurs, il y a plusieurs contraintes pour que le sujet *un N* puisse s'employer dans une phrase générique.

Le sujet *un N* n'est pas adéquat aux phrases génériques qui présentent une description scientifique ou objective tandis que le sujet *le N* l'est. Il s'emploie en général pour les phrases génériques qui présentent une description subjective ou estimative, donc il subit dans la plupart des cas une opération de modalité comme l'emploi du conditionnel ou des auxiliaires modaux tels que *pouvoir*, *devoir*, etc.

Si l'observation est faite de plus près concernant la qualité des noms de *un N* apparaissant comme sujet d'une phrase générique, il se révèle que ces noms ont un dénominateur commun avec ceux qui apparaissent sans article en position d'attribut dans une phrase copulative : ils représentent la profession, le statut, la nationalité, le sexe, le signe du zodiaque, la religion, etc.

Ce type de noms a la « fonction de description de rôle », qui s'active à condition qu'il s'agisse de l'opération de la classification socioculturelle et que les classes sont pré-construites. Ces classes pré-construites s'accompagnent le plus souvent d'une estimation généralement acceptée, comme une norme sociale ou un stéréotype, qui n'est pourtant pas scientifiquement prouvée, mais qui n'est que subjective. Ainsi ce type de noms convient-il aux phrases génériques décrivant une estimation subjective. S'il s'actualise en forme de *un N*, c'est qu'il ne se suppose pas forcément une espèce universelle, mais pragmatiquement un individu particulier.